

早稲田大學東洋哲學會 第三十七回大會

〔日時〕 九月十五日（火曜日）午後一時より

〔会場〕 オンライン実施（Zoom上）

〈研究発表および講演要旨〉

【研究発表】

道元の諸法實相觀

米野 大雄

日本曹洞宗の開祖道元の名著『正法眼藏』内には「諸法實相」と題した巻があり、道元の諸法實相觀が明示されている。しかし、その内容は晦澁で明瞭とは言い難い。そこで、本発表では、「諸法實相」巻の用語を『正法眼藏』の他の巻を参照することにより、内容を把握し、思想的特徴を明瞭に把握することを目的とする。また、道元以前の禪典籍や天台關連の文獻を参照し、道元以前の諸法實相觀を見た上で、道元の諸法實相觀の特徴を、その思想的獨自性に焦点を絞ることにより、より明瞭に把握する。

辯才天の惡龍教化と龍口明神―江島緣起説話の成立をめぐる―

田中 亞美

『江島緣起』には辯才天の惡龍教化が説かれるが、惡龍の懸想を縁とした教化の話は、他の緣起類における惡龍教化譚とは明らかに異質である。この話は、どのように成立したのだろうか。本発表では、まず、辯才天の惡龍教化譚がどのように形成されたかを、觀音の聖天教化譚との關連から考察したい。さらに、觀音信仰との關連が窺える泰澄と龍口明神の説話を中心に、緣起の成立環境において龍口明神がどのような役割を果たしたのか考察する。江島緣起の成立背景を探ることで、日本の辯才天信仰の多様化が進んだ過程の一端を明らかにしたい。

「暢玄」の「玄」にみる『抱朴子』内篇の著述意圖

富田 繪美

『抱朴子』は、神仙・方藥・養生・延年などについて述べ、「道家に屬す」内篇と、世俗の得失や是非について述べ、「儒家に屬す」外篇から成る。著者葛洪は内篇の卷二「暢玄」において、玄にもとづく存在論を展開し、玄の體得者が最高であり、知足者をそれに次ぐものであると述べる。従來の研究では、内外篇の關係を巡って、外篇において至高とされる逸民と、この知足者とが近似していることがしばしば指摘されてきた。本発表では、「暢玄」における玄の分析を通して、『抱朴子』内篇の著作意圖、および内外篇の關係について考察する。

『聲聞地』と『法蘊足論』の關連性…止觀を中心として

阿部 貴子

初期瑜伽行派の論書『瑜伽師地論』とりわけその最初期の文獻『聲聞地』は、説一切有部のなかで活動していたヨーガ實踐者によって作成されたといわれている。では『聲聞地』のヨーガ體系や理論に影響を与えたものは何か。すでに『聲聞地』が『修行道地經』や『サウンダラナンダ』の影響を受けていることは知られている。しかし阿毘達磨文獻との關わりについてはいまだ網羅的な研究はない。そこで、本発表では『聲聞地』と『法蘊足論』の關連性について、特に『聲聞地』の實踐理論の中心である止觀に焦点を當てて論じたい。

經學としての朱子學——朱熹の『孟子』解釋をめぐる

垣内 景子

今後の朱子學研究の大きな課題に經學の問題がある。儒教の正統を自任する朱熹にとって、經學がその生命線であることは言うまでもないが、今日の我々にとってその意味するところを十分に描き出すことは容易ではない。朱子學における經學の意味を探るためには、朱熹自身の「格物窮理」の現場として經書注釋の個々の場面に立ち會うしかない。その試みとして、本発表では、朱熹の『孟子』解釋を取り上げる。五經や『論語』といった他の經書とは性質を異にする『孟子』を、朱熹は經書としてどのように讀んだのかを考察したい。

【講演】

中世の神事藝能を考える

山本ひろ子

近年、宗教テクストの調査・翻刻・解讀による、中世神道關係の研究がめざましい。成果は大きいが、こと神樂の現場に目を轉じた場合、担い手や藝能のありようは見えてこない。口誦や藝能を脇においた方法、教理・テクストへの信奉もその一因だろう。民俗學・歴史學によっても、その考察はなされない。

ひとつの試みとして、中世阿蘇社の神事藝能をとりあげる。文獻上の記述はわずかだが、想像力も動員しつつ、中世末期、歴史の変轉に姿を消した職掌人と多彩な祭事の姿をあぶりだしてみたい。